

地球を守ろう<グリーンカーテン>

しらゆり保育園（島根県松江市）

[5歳児]

事例 地球を冷やしてあげよう

子どもの姿・つぶやき

○ゴーヤ、ヘチマ、なた豆でカーテンを作ろう！
どこに植えたらいいかな？

(環境アドバイザーさんの知識)

お水をどうぞ

園の西側と南側に植えるといいよ。

「そうか。日のよく当たる所がいいだね」

○お水をあげよう

手作りのミニダム（ドラム缶）に溜まった雨水を
ゴーヤなどにあげよう

「ミニダムに沢山雨水が溜まるといいね」

「‘もったいない’ からこぼさないように入れよう」

○ミニダムの中をのぞく（5歳児）

「雨が降らないから、ミニダムに水が溜まらんね」

*初めは水やりなど栽培作物への興味が見られなかった子たちも、花が咲いたり実がなったり生長が進むにつれ水やりなどのかかわりが積極的になるという変化がみられるようになった。

○子どもたちの方から

水やりを提案してくる。友達を誘って水やりをする。

(4歳児)「あのね、野菜ものどが渴いているんだよ。だから、お水たくさんあげないとね」「水をあげた方がいいと思う」

- ・(保育者の声かけで)「うん。わかった。ゴーヤやヘチマにもあげるよ」
- ・ゴーヤの前までジョーロを持って来るが、「あっ、やっぱりお花にお水あげる」といって、ゴーヤの前のサンパチェンスに水やりをする。

*栽培物でも子どもたちは、興味のあるものや好み（色、味、形など）に偏りがあり、それが水やりの姿にも表れていると思った。そうした気持ちを受け止めながらも、全てのものに同じように思いやりの気持ちをもってくれるよう場面をとらえて大人がかかわり知らせていくことも大切だと思った。

○お水をあげよう

- ・2歳児がジョーロをドラム缶の蛇口の前に置き、ジョーロがいっぱいになったので持ち上げようとするが重くてできずに困っている。
- ・横で見ていた5歳児女児が「私が一緒に持ってあげるね」と、ジョーロを持ち上げて、2歳児の子に渡してあげる。その後も、後に何人かの2歳児がジョーロを持って並んでいたが、同じようにジョーロを持ち上げて渡す姿がみられる。

*自然と人とがかかわる姿、さらには人と人とがかかわる姿が色々な場面で見られた。どちらも思いやりの優しい気持ちでつながっていると思った。

○米のとぎ汁をあげよう

米とぎを年長児が当番で行っている。とぎ汁は捨てないで栽培物にあげたり、保育室の掃除に使ったりしている。米とぎが終わると、バケツに溜まった水を持って庭に運ぼうとする姿が見られる。

(おばあちゃんの知恵)

野菜にあげるんだよ。この白いお水は栄養たっぷりだからね。ビタミンも入っているの。おばあさんが言ってたよ。

「だって、そのまま流してしまったら川や宍道湖が汚れるしもったいないもん」と言う。



保育者のかかわり・援助

- ・一緒にミニダムの中を見ながら、気持ちを受け止め共感するような言葉をかけたり、歌ったりする。

*ミニダムの仕組みを理解したつぶやきだと思った。同時に、ミニダムの水で水やりをしたいという願いも込められていると感じた。

- ・本当だね。雨が降らないとミニダムが空っぽ。雨がいっぱい降るといいね。

♪雨、雨、降れ、降れ・・・

- ・おいしいと感じるトマトやキュウリ、スイカなどには水やりをするがゴーヤ、ヘチマには水やりをしない。
- ・特定の野菜だけでなく、全ての野菜に思いをもち水やりをして欲しいと思い、声をかける。



(5歳児へ)「○○ちゃん手伝ってくれてありがとう。△△ちゃん上手にお水をあげることができたよ」

(2歳児へ)「よかったね。お姉ちゃんが手伝ってくれて」

- ・「そのとぎ汁はどうするの？」と訊ねる。

- ・「そうなんだ。お米のとぎ汁は栄養のあるお水なんだね。野菜が大きくなるといいね」と言う。



- *とぎ汁を栽培物にあげたり、掃除に使うことは、人に言われてするのではなく、日々の生活の流れの中で自然と子どもたちが自発的に出来るようになっていく。
- *とぎ汁を流すことをもったいないと思う気持ちや、とぎ汁のことをいろいろと知ることにより、栄養を栽培物にあげようとする思いやりの気持ちが育まれていったと感じた。

○堆肥をあげよう

- ・3歳児がゴーヤが黄色くなっていると気づき、保育者に言ったことをきっかけに、3～5歳児の異年齢の子どもたちがどうしてか話し合う。

(おじいちゃんの知恵)

黄色くなっているのは、栄養が足りなくて枯れていったんだよ。枯れると食べられなくなるから栄養をあげるといいよ。

「栄養が足りないんだね。じゃあ、ゴーヤの栄養って何かな？」

「あっ、そうだ堆肥だ！みんなで作った堆肥をあげよう」

「堆肥は臭いがしないね」

「ふかふかして、温かいね…今日は48℃になってるよ」

「残った食べ物はもったいないけん、堆肥の箱に入れて畑の栄養にするんだよね」

- ・ある日、段ボールコンポストの周りに虫が飛び、中を開けると幼虫がいっぱいいる。「わ～、小さい虫が周りにいっぱい飛んでる。中は、大きな幼虫がいっぱいいる。何の幼虫かな？虫よけスプレー（殺虫剤）してみよう」

- ・ところがしばらくして、「あっ、温かくない…。先生、どうしてかな？(20℃)また温かくなるかな？」

(コンポストのことをよく知っている地域の人の知恵)

虫よけスプレーをかけると、堆肥にしてくれる良い菌も死んでしまうんだって。使った油やぬかも入れてみるといいらしいよ。それに段ボールを覆う布が小さいと虫（ハエ）が入って、卵を産みつけるから大きい布に換えた方がいいと教えてもらったよ。

「お日様の所に置いてみたら？」「お日様の所もだめだった…。温かくなってないね。どうしよう？」「そうだ、残飯とかいっぱい入れて、混ぜてみたらいいんじゃない」

- ・それから毎日、残飯と多めのぬかを入れ混ぜる。大きい布にかけかえる。
- ・3日～4日たつと再び温かくなる。

「先生、また温かくなって湯気が出てるよ。今日は50℃あるよ。良い菌が元気になったんだね。よかったね」

- ・段ボールコンポストの堆肥づくりを開始し、3か月近くたった頃、開けてみたら…「わ～残飯が消えてるよ。どこにいった？ねえ、先生どうして？」「そうか。それで消えて堆肥になったんだね」

○グリーンカーテンって（ゴーヤ、ヘチマ、なた豆）本当に涼しいかな？地球も涼しい？

- ・「ここにもあったよ。影のところは涼しくて気持ちいいんだよ」
 - ・藤棚の下に影を見つけ涼しい場所と感じている様子である。
 - ・ゴーヤの陰ができているベランダの場所を指さす。
- 「葉っぱの形の影があるよ」「お部屋の中も涼しいよ」「地球もきっと涼しいね」

- ・当初は疑問を考え合う姿を見守る。この疑問を家庭にも広げていきたいと思い、N児から祖父に聞いてもらうよう声をかける。

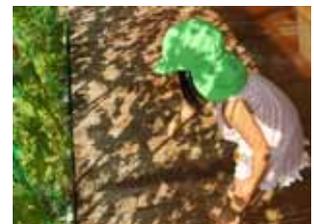
○堆肥作り（4月～）

各保育室で、段ボールコンポストをつくる。子どもたちは日頃できるだけ食事の食べ残しをしないように心掛けているが、それでも残った物や、給食室から出る野菜の皮や、切りくずなどを入れ毎日かきまぜる。中に入れていく温度計で温度をチェックしている。

「本当だ。冷たいね。コンポストのことをよく知っている人に聞いてみるね」と言う。



「本当に不思議だね。あのね、コンポストの中の良い菌が、残飯を土（堆肥）にかえてくれるから、形がなくなるのよね」と言う。



みどころ

子どもたちの身近なところに「コンポストや栽培物」「温度を感じることでできる生き物」などの環境があり、子どもたちは自分たちの大切な場所を通して幼児なりに「地球」を感じ、思いをめぐらせています。また、自分たちの疑問や課題に応じた様々な情報を取り入れて、“子どもたちが直接かわって変えていく環境”になっていることで、子どもたちの主体的で意欲的な活動に結び付きます。